

ノックアウト・ムービーズ 私をKOで打ちのめした映画



著者：Lucky Day
当コラムニスト
映画作家、元プロボクサー

Round 20

『ソルジャーブルー』

(Soldier Blue 1970年 ラルフ・ネルソン監督)

平和のシンガー

「ドクターはドクターの仕事、教師は教師…みんな自分の仕事だけやってるなんて本当に信じられないわ。だってクリエイティブな人は、なんだってできるのよ。いろんなことしないと、凝り固まってドンドン役立たずになっちゃうのよ」…平和活動家でシンガーのパフィ・セントマリーはカナダ・サスカチュワンの出身。世界の調和を歌うパフィは、ベトナム戦争でお金もうけ中のジョンソンやニクソン等の悪代官(大統領)たちにブラックリストに入れられ仕事から干された。「偉大な祖国の正義のために！」とか、どこの軍国主義者も同じ口調で、せっかくなまく大衆を操っている時に、種明かしされたら元も子もないから。

兵士は「国の平和のために」って他国の人を殺すけど、それで平和が訪れるの？軍国主義者たちは、もしも兵隊がひとりもいなくなったら、ひとりりで戦争すると思う？

今のようじゃない方法で祖国を思うことはできないの？

「兵隊よ、野獣どものためじゃなく、デモクラシーのために闘おう！」と呼びかけたチャップリンを引き継いだパフィの歌は世界中で大ヒット。

被差別者側のディレクター

スター俳優を使わずに、誰も扱わない地味な題材で、それでもアカデミー賞を獲得する監督は稀で本物。

知恵遅れの大人を主人公にした『まごころを君に』(1968)でクリフ・ロバートソンに主演男優賞をもたらした、ケネディ大統領暗殺の1963年『野のユリ』でのシドニー・ポワチエの黒人初の主演男優賞獲得は、時代を変えた。貧困から生き延びるためプロボクサーとして闘っていたウクライナ移民のジャック・バランスを起用した『ヘビー級ボクサーへのレクイエム』は、のちにジャックのアカデミー賞獲得につながる。いずれも社会派のラルフ・ネルソン監督の作品。



▲ 平和のシンガー、パフィ・セントマリー



▲ 本作品は「サンドクリークの虐殺」に基づいている。Wikipediaに詳細あり。

シンガーとディレクターが組んだ

1970年当時、誰も見たことがない西部劇作品が登場し、その後のウェスタンのみならず映画そのものの作り方に大きな影響を与えた。ラルフが監督し、パフィが歌った『ソルジャーブルー』がそれ。

人は自分に都合なところしか見ないから、何千本の映画が作られ、何万冊の本が書かれようが真実はない。ごくまれに真実が描かれるのは、公正な視点を持つ人が作り手の時のみ。それまでの映画では、インディアンは野蛮人が騎兵隊が正義の味方という設定がほとんど。常識人なら、誰が考えても大間違い。他人の土地に武器を満載して乗り込んで土地も財産も食べ物も奪っておいて、正義の味方であるはずがない。当時、進行中だったベトナム戦争に大きな疑問が投げかけられた。じゃあなぜ何千本もの映画の図式が大ウソでまかり通った？作った人と観る人たちが加害者で一致してるから。盗っ人は「盗ってない」、空き巣は「入ってない」、政治屋は「憶えてない」ってシラを切るように加害者側が真実を話すことは、まずない。人の家(うち)に土足で乗り込んだ側が作った戦争映画が真実だったのは見たことがない。もしもマフィアが映画を作ったら「マフィアは素晴らしい」という傑作ができるはず。スリや置き引きにあった人が盗まれた状況を正直に話すように、かなり(または完全に)真実なのが被害者側が作った映画だが、世のほとんどは、ひき逃げ犯の話聞いて、ひき逃げされた人を叩く。いい例は、今だに「コロンブスがアメリカ大陸を発見」と記す世界中の教科書。先住民が何万年も住んでたのに「発見」？コロンブスは大陸に行っていないのに？先住民の人たちの中では「コロンブスはヒトラーと同じ。全員皆殺し作戦を展開」と言われている。

視点

ラルフ・ネルソン監督は白人だがインディアン側の視点を持っていたから、インディアン関連のハリウッド映画では断然、観るべき作品。(ところで、本当はインディアンと言わず「先住民」とか「ネイティブ・アメリカン」と記すべきところを映画が公開された1970年当時の言葉で本記事は表現)

同じ視点を持って描かれた超貴重な一本は、オーストラリアのアボリジニーの実話『裸足の1500マイル』で、監督は現地白人のフィリップ・ノイス。同作品が公開された2002年7月、フィリップと一緒に朝食をとり「外から客観視する作品」づくりのことを話したのはシチリア島の日差しの中。動物の世界でもよそ者が原住民を根絶やしにすることが多いようにオーストラリアではアボリジニー撲滅計画が、アメリカではルーズベルト大統領の賛同の元、インディアン抹消作戦が行なわれた。「祖国アメリカでも犬扱いされてるのに、今度は1万マイルも飛んでって善良な農民を殺せだ！俺は人殺しはしない」と、ベトナム徴兵を拒否したオリンピックの金メダリストで世界チャンピオンのアリの言葉は、この映画の3年前に洗脳された人々を目覚めさせた。軍国政府に正面から挑んだアリは稀有で、大体のスポーツ選手はオツムサッパリで政府の犬。

映画に限らず客観的視点を持たない「自己都合もの」が主流だから、観る気も読む気もしないものが溢れるが、大衆は、それらを眺めてハッピー。何度か一緒に観た映画評論家の第一人者で日本映画学校の佐藤忠男校長は、こうした意図的現象を「自惚れ(うぬぼれ)鏡」作品と称し、多くの名作とされる作品名を挙げた。「ウソは大きい方が人は信じる。そうしたら、こっちの思うツボさ」と言ったのはナチスドイツの宣伝相ゲッベルスで、同じ人だまし方法は今も世界中で大成功。簡単に騙される人の共通点は、対象となる国に行っていないこと。異国の人を理解する唯一の方法は彼らと暮らし、一緒に働き、一緒に食べ、一緒に苦しむこと。そうしないでいて、他国の人々に対して有罪判決を下すことは、レストランに行かずに、その料理の評価を本にしちゃうこと。

『ソルジャーブルー』みたいな真実ものは、自分を正当化する市民の大半から迫害され、脅迫や嫌がらせを受ける。彼らがわかってないのは、その嫌がらせが作品の真実ぶりを証明していること。上映禁止になる理由は内容が本だから。内容が事実と違うことが禁止の理由だったら「スパイダーマン」も「アイアンマン」も大部分の映画が禁止になる。架空の正義で人はいい気持ちで、真の正義は覆い隠す。いわゆる傑作ではない『ソルジャーブルー』は、その勇氣溢れる正義感によって、インディアンのみならず、各地の虐げられた人たちに公正な視点をもたらすという点で、傑作以上に価値がある社会派作品。

(Lucky Day)



▲ ラルフ・ネルソン監督